

相談事例における教育相談活動のあり方について の検討 (1)

藤 土 圭 三

A Study for the Counseling Relationships on the Cases (1)

Keisō Fujito

問 題

筆者は平成5年4月から本学文学部に勤務するようになり、教育相談センターに兼務する形で教育相談(カウンセリング活動)を担当するようになった。教育相談センターには専任の相談員が勤務し、精力的に活動されていた。当初は、筆者自身も新しい大学に赴任したばかりで、担当する授業の準備と学部4年・修士課程2年の学生の卒業研究への援助に追われていた。

当時、教育相談センターでは、教育学や心理学担当の教官が、相談担当者となり、専任相談員は来談希望者のインテーク面接を担当し、相談内容を判断して、相談担当教官に紹介するという形を取っていたが、このシステムを変更して、専任相談員にも、積極的に来談希望者を引き受けるようにし、従来の相談担当者(教官)は教育相談センター運営委員として、センターの運営に対する助言指導を担当すると言う方向に変更した。内部組織の変更はしたもの、来談希望者が少なかったため、専任相談員が近隣の幼・小・中・高等学校・地区公民館などを訪問し、教育相談センターの業務内容についてのPRにつとめた。PRに併せて、専任相談員が、熱心に相談活動に従事したこともあって、徐々に来談希望者が増加した。今日では、担当の来談希望者を引き受けて、活発な相談活動が展開されるようになった。

本研究では、筆者の担当した相談関係(counseling relationships)について事例的に検討し、今後の相談活動のあり方について、検討することを目的とする。

期 間：平成5年4月からの2年間

分析対象資料：17事例

筆者の担当した相談事例について、相談員のかかわり方を中心に検討した。

結 果 と 考 察

事例1：女子青年の来談

#1：他大学のカウンセラーからの紹介で来談。クライアントの話し方には違和感があり、テンポがあわない。相互交流が難しい。サークルでの対人関係上の不満が語られる。人権無視、雑用ばかりさせると訴える。一年間は寮生活。今年からマンションで、暮らしている。就職は出身地でしたい。就職運動が大変だと言う。

#2：弁当持参で来談。単位のこと、集中講義のことなどを話す。採用試験についても語る。無頓着に話をすすめる。早口で、しんどいを連発する。どうしてこんなにしんどいのかと言わんばかりである。帰省時の話をする。港に着く、親が迎えに来る、幸せと言う。

3：不意に来談

コーヒーとサンドイッチ持参。髪を手入れしたためか、ふっくらとしている。元気がよい。英語検定2級にチャレンジすると言う。

4：不意に来談

涙して英語検定に失敗したと言う。どうしてこんなに不幸なのだろうかと言う。

友人から監視されている。自分を守るためにガードマンを募集すると言う。

ガードマンは自分にセックスを求めない人であることを嘔発見器にかけてテストして採用したいと言う。

5：弁当持参で来談

落ち着いている。どうですかとの質問に、最近は元気です。もうすぐ卒業です。

故郷の会社に就職も決まりましたと言う。

面接理解：一年間に渡る不定期面接であった。クライアントの思考過程に了解困難な点があったが、必要な単位も習得して、2年間の課程を終了し、卒業した。カウンセラーの元に一年間、弁当持参で来談した。クライアントは中学のころに発病し、医師の援助により、軽快し、大学に通学出来る程度にまで回復した。単位取得は順調に進むが、対人関係に苦しみ、カウンセラーの元で何度か涙ぐんだ。しかし、クライアントはよく頑張り、卒業した。相当な症状があっても、症状コントロールが上手になれば、卒業可能な学生の見本と言える。とは言え、クライアントはカウンセラーとの間に面接契約は出来ず、自分の気分通りに来談した。クライアントと付き合う人から反発を感じたり、苦慮したりし、その苦しさを訴えた。特に対人関係上での調整能力に弱く、カウンセラーとの面談の中で、その苦衷が強く訴えられた。カウンセラーはクライアントの苦衷を丁寧に聴き、苦しい気持ちを受容し、クライアントの自由な表現を促し、カウンセラーの元でなら何でも話せると言う関係を形成した。自由に話せる関係はクライアントのための心の母港となり、ことあるごとに来談して、苦しさ・不安を訴えて安定した。ここでのカウンセラーはクライアントの生活を具体的に援助し、一つ一つの問題の解決策をクライアントと共に検討し、助言した。

事例2：女子青年の保護者来談

知人からの紹介で両親のみ来談。クライアントは、高校2年の女子で、家出をし、一人暮らしをしたいと言うが、親として、どうしたらよいかとの相談であった。クライアントが高校受験の時、高校には行きたくないと言うのを、説得して行かせようとしたことがきっかけとなって、家出をしたと言う。両親共に高学歴者で、特に母親が開業し、父親がそれを援助している。

面接理解：一回だけの面接に終わったが、両親共に高学歴で、家業では母親が主催者で、父親が援助機能を担っている。クライアント以外の兄弟は全て両親の期待する高学歴にあり、クライアントだけが、親の価値観とは反対の方向にある。家族から受け入れられない閉息的状況を抜け出すために家出という方法を取ったものと推察される。クライアントは両親に理解されないままで、相談活動も中断の形となった。親の側に妥協を許さない価値観と考えがあり、子どもが自分の考え通りに行かない場合の子どもへの圧迫には計り知れないものがある。一回だけの面接であったが、来談した両親は、カウンセラーが両親の価値観を積極的に支持しないので、不満を感じたままとなった。我が子を思い通りに育てなくては落ち着かない保護者の場合、その相談活動には一層の工夫が必要となる。特に交流豊かな相談関係の形成が大切である。どうやって、保護者と相談関係を形成するかが大きな課題となる。

事例 3：女子青年の来談

異文化について語る。国別に検討するよりも、個人差として理解する方が、より効果的と言うことになる。両親の老後を世話するのが絶対の義務ですと言う言葉が印象的であった。

面接理解：異文化の中で生活し、日常生活の中で、積もるストレス解消のために来談したものと推察する。以後、2年間、時折来談し、自由な話し合いが継続した。

定期的面接を契約しての面談ではなかったが、ことある毎に来談した。言葉が如何に通じにくいかではなく、非言語的な何かが伝わりにくいことを体験した。言葉では言いたいことが理解できるのに、伝えたいことが納得できないことのはがゆさ、難しさを実感した。この理解の難しさは、個人的なものか、異質文化のためなのか、注目したい。

事例 4：女子青年の来談

#1：クライアントは、A県の出身、大学を卒業後公的機関に勤務したが、ストレスを強く感じたためか、下痢、倦怠感などの症状がある。姉も公機関に勤めている。クライアントは勉強ができたので両親から期待されていた。特に父親に可愛がられていたとのこと。素直な子で、反抗も無く、成長したとのこと。

#2：高校を卒業して、大学に進むが、希望する大学に失敗し、これがきっかけとなって激しい不安に襲われる。親は、自作農で、うまくゆかねば帰って、後を継いでくれと言っている。現在の職場に勤めるようになって、薬を多量に飲み、ふらふらになったことがある。救急車で入院したとのこと。

#3：激しいうつ状態になる。光りものがすごい光に見えて(感じて)、身体に当てたくなくなり、自傷行為を誘発する。精神科を受診するように勤める。

#4：母を連れて来談。家(故郷)に帰っていた。中学校時代は良い先生に恵まれて、成績も向上した。高校は公立高校に入学し、成績がよく、進学コースに在籍した。

#5：精神科に受診した。

#6：職場に復帰した。勤務体制を聞いて、出勤しようと思っていたが、家から電話がきたことがきっかけとなり、混乱し、身体が硬直して、起きられず、職場を欠席した。職場の管理者はこのままでは、勤務出来ないと言う。

#7：母親より連絡が来る。クライアントが不安定で、仕事は辞めることにしたとのこと。

#8：管理者より電話、クライアントに出勤するように進めていたが、出勤できない。管理者がクライアントに電話したら、昨夜は薬を飲んで、寝たので寝すぎて約束の時刻に遅れたとのこと。

#9：管理者より電話、クライアントは退職することになったと言う。

#10：予定通り来談する。下宿する家も見つかり、線路側のアパートに住むようになった。汽車が通る度に大きな声を出して気晴らしをしているとのこと。精神科医師にもかかっているとのこと。薬を無制限に飲むし、自傷行為があると言う。医師が心配して、入院して、治療を受けるように進める。精神科医師と病院の心理カウンセラーの治療を受けることになる。何故、自傷行為があるのか、自分を傷つけることで、何を充足しようとするのだろうか。

#11：病院の心理カウンセラーから電話。クライアントのこれまでの事情について経過を説明する。

面接理解：クライアントは始め抑うつ状態を訴えて来談した。既往症について聴取すると、一年前にも同様の症状を訴えて入院歴がある。今回は二度目の発病と言う。自傷行為と薬の一気飲みが激しく、自宅で療養することが難しく、精神科に入院して、治療を受けることになる。

現在は、症状も軽快し、故郷に帰り、両親とともに生活している。

事例 5：女子青年の両親来談

1：女子高校 1 年のクライアントに男子友人ができて、家出した。両家で捜して、連れもどしたが、男子高校生との交際は続いている。両親は共働である。

夫婦仲に緊張がある。クライアントは高校での成績はよく、親にも信頼されていた。クライアントは母親似で、性格は社交的で、人づきあいがよい。友人とは深い仲になっていると言う。

2：クライアントと母親が来談。クライアントは身長、162センチ、体重 50キロ。短髪で、明るい感じの高校生。父親との折り合いが悪いと言う。クライアントは友達の家で同居しているとのこと。男子高校生とは現在も付き合っていると言う。

3：母親から電話。クライアントが家に帰ってきたが、両親とは疎遠な関係にあるとのこと。

面接理解：遠距離からの相談と言うことと、クライアントが家に帰ってきたと言うこともあって、継続面接はできなかった。その後の連絡では、特に状況に変化はないが、何となく学校にも行くし、男子高校生とも交際しているとのこと。

両親共に、堅実な方で、面接においても、内心は明かさないうまま、子どもだけは何とかして欲しいと言う感じであった。堅い感じの面接であった。倫理観の伴う事例の場合には、面接が堅くなり、豊かな相互交流は形成されないままの面接で終わることが多い。

事例 6：中年女性の来談

知人夫婦の妻が、某宗教入り、朝早くから朝の修養会に参加し、信仰している。宗教の本を売り歩いているとのこと。知人の夫が可愛そうだと言う。

精神保健センターにも相談したが、はっきりした回答は得られなかった。夫婦には三人の子どもがいるとのこと。妻は宗教の教えを守り、夫が帰ると玄関で正座をして迎え、言葉使いも正しく、立派な行動とのこと。

面接理解：夫が何も言わないで、落ちついているのなら、しばらく様子を見る方がよいと伝える。何の目的で、相談に来たのかははっきりしないまま、相談が終了した。本事例は、クライアントが相談センターと、そこで働くカウンセラーに対する探索行動か、あるいは自分の問題を他者の問題として相談し、カウンセラーの考え方を尋ねているのかも知れない。いずれにしても複雑な面接形態となる。

事例 7：女子青年の来談

性格上の悩みがあると言って来談する。自分は「そううつ」が激しく、「そう状態」の時には、すごく調子がよいが、「うつの時」は全く何もしない。波（変動）が大きくて大変だと言う。性格に関係する本を沢山読んで、性格改造を試みたがうまく行かないと言う。

面接理解：抑うつが激しいときは、医師に相談して薬を貰って、抑うつ状態を軽減することが大切と伝える。同時にカウンセリングを受けて、性格について検討してはと提案する。しかし、医師にかかって、投薬されたら、元気となり、カウンセリングには来談しなくなった。知的活動の旺盛な大学生の場合によく見られる相談である。自分の問題を知的に理解して、自分で何とかしたいと言う気持ちが強く感じられる。自分の性格的問題を自分で改善しようとする考えは、間違いとは言えないが、実行はなかなか難しいことである。性格的問題の解決にはそのための関係（カウンセリング関係）が必要である。

事例8：中年女性の来談

クライアントは公務員の夫と結婚し、2人の子どもをもうけた。会社に勤務していた経験を生かして、現在もパートで、系列会社に勤務する。職場の人間関係に悩むとのこと。

面接理解：一回だけの面談であったが、職場の人間関係について詳しく聴取した。

内容的に事実なのか、関係念慮なのか、はっきりしにくいものがあった。希望すれば継続面接ができると伝えたが、継続面接にはならなかった。潜在化した病理に注目しなくてはならない事例である。このような事例の場合には、早期発見早期指導にあれば、来談の必要を伝えて、来談するように強く進めることになるが、メンタルヘルスの場合には、クライアントの面談動機の高まりを待つか、促進のための工夫するか、判断が必要である。

事例9：課題のある幼児の指導に困る教師の面談

#1：クライアントに、妹が出来た。クライアントが拒否的となり、寝室に行って寝ないとのこと。園ではおとなしい子で、問題はなく、よく遊ぶ。教師が名前を呼ぶとビックとすることがあると言う。

面接理解：妹が出来て上の子ども（4才児）の退化に悩む母親からの相談を受けた教師が来談した。幼児の発達過程において見られる現象であるが、初経験の母親と若い教師にとっては衝撃的な出来事だった。名前を呼ぶとビックとするという行動観察はクライアントの性格理解のための有力な情報となる。

事例10：女子青年の来談

#1：父は公務員、母は教師、兄、姉も大学を卒業して、独立して働いている。クライアントは姉を理想化してる。クライアントは完全性の強い性格で、徹底的にことを運ばないと気がすまない。何もかも、一生懸命に取り組むので、疲労が重なり、抑うつ状態になる。大学でも複数のクラブに入り、両方のクラブで精一杯やろうとする。これまでも何度か息切れしたことがあると言う。

#2：クライアントと母親来談

抑うつ傾向が強く、精神科に受診して、与薬される。落ち込みが激しい。善行によって切り抜けようとしている。小学校の時にいじめに合い、良い子傾向が一層強くなったと言う。すごい迫力で、母が追ってくると言う。何時も姉と比べられると言う。

#3：母親より電話

実習のことでA先生にレポートを出したことで、状態が悪くなり、寝込んでしまった。食事もしないで、寝てばかり、心配ごとばかりを考える。体が振るえる。医師からの薬を飲んで眠っている。

#4：母親より電話

姉の所に行くと言う。医師と相談したら、行きたければ、行ってもよいと許可され、クライアントもその気持ちになり、姉の元に旅にでた。

#5：クライアントの母親来談

母親自身も偏頭痛があるとのこと。祖父、祖母、父、母親、長男（兄）は結婚している。姉は大学社会科学系学部卒業後、上京して、働いている。母は建て前、表を繕う女性。怒っていても、笑顔をする。子どもにピアノを習わせている時に、父親がテレビを見ている。子どもが見たがる。母親は父親にテレビを切してほしいと言いたいが、それが言えないで、テレビを小さくしてくださいねと言って、音を小さくさせる。父親が聞こえないと言う。子どもはテレビ

を見たがる。母親は子どもとTVの間に体を入れて、子どもに見せないようにして、ピアノを教えようとしたと言う。面接後半で、母親は涙ぐみ、「私がこれだけ一生懸命なのは、祖父母がいるからです」と言う。「祖父母は高齢にも関わらず、元気で、凄い人なのです」と言う。

カウンセラーとの面談の中で「私の偏頭痛は気苦労と、遠慮と、建て前から来るストレスだ」と言う。

面接理解：見るからに真面目な青年。毎週、家に帰っている。母にすべてを話して、気持ちを安らげているとのこと。A先生に傾倒し、A先生と共に研究したいと言う。やる気十分、しかし、能力がついて行かない。行き詰まり、不安を感じる。クライアントの要求水準が高く、何時も緊張感一杯である。それに母親自身にも高い緊張感を感じさせるものがある。難しい事例であった。色々のエピソードはあったが、卒業できた。家族全体が向上主義の考えが強く、それがストレスとしてクライアントに覆いかぶさっている。特に同胞内に有能者がいるとそれだけでクライアントに取っては大きなストレスとなる。避けることのできない家族関係にクライアントがどのように対処するか。カウンセリング目標はここにある。

事例11：中年男性の来談

男子はセックスに背広だが、女性はセックスに十二一重であると言う。基本的には男子も女子もセックスは必要であり、どのように渡り合う（交流するか）かが大切なのだという。自分は異性とは、セックスは不可能なのだという。マスターベーションをする時に、異性の声で刺激してほしいのだと言う。

自分は不安定であり、自分が信じられない。すぐに怒る。育ちのこともあり、家族に対して、不信感を抱いている。自分だけが差別されたという気持ちがある。

面接理解：クライアントは思考過程に偏奇性が顕著で、すでに医師から与薬されていた。面接の中、母親との長年に亘る緊張した生活が、クライアントの生活に大きく影を落としていた。

事例12：中年女性の来談

背の高い大柄の女性、大学生生活科学科卒業。現在は専門を生かして働いている。自活しているとは言え、収入が少なく、どうにか食べる程度と言う。近く専門書を出版する予定とのこと。家族は両親と兄と自分の4人家族とのこと。兄も独身で他都市に住む。父は酒飲みで支配性の強い人、妻（クライアントの母親）に対して暴力をふるい、乱暴な人。会社が倒産した時、父の車に乗って町を出た時、一緒に死ぬのではないかと強い不安を感じたと言う。父が兄を連れ出さず、自分を連れ出したと言うことで、複合心理となり、今も心に残っているとのこと。結婚を考えているが、男性に恵まれない。人の紹介で、多くの人とお見合いをしたが、結婚する気持ちになれないとのこと。

面接理解：電話で、貴方は心理カウンセラーかと問いかけてきて、そうですとの応答に、相談に乗って欲しいと言って来談され、以上のような話しをした。面接過程の中に、何か深い意味を感じ、面談終了後、続けて来談しますかと問いかけたところ、また電話で依頼しますとのことだった。カウンセラーが値踏みされたのかも知れない。

事例13：男子青年と母親来談

母子一緒に来談する。クライアントは強迫神経症と医師に診断され、治療中であった。クライアントは高校卒業後、音楽大学に進み、卒業したが、不安と心配が強く、親元に帰った。

相談事例における教育相談活動のあり方についての検討 (1)

高校時代から強迫神経症にかかり、不安・緊張が強く、現在も状況は変わらないとのこと。両親とも教師で、外聞を気にされ、クライアントが人目につかぬ所で生活して欲しいと訴えた。

面接理解：医師の指導によって治療中のクライアントであった。治療がはかばかしく行かない苛立たしさを表出された。長時間を必要とすることを伝え、気長に治療を受けられるように助言する。

事例14：男子青年と両親来談

学校に行かない、辞めたいと言う。高校を辞めて音楽をやりたいと言う。

父親は単身赴任中で、時たま、家族の元に帰ってくるとのこと。父親は会社を経営していたが、行き詰まり、自分の会社を閉じて、兄弟経営の会社に勤めている。姉は芸能人を希望し、養成学校に在籍している。クライアントは激しい教師不信に陥っている。家庭には、両親と父方の祖母と母方の祖母がいる。母親は会社でアルバイトをしている。クライアントは背の高い痩せ型の青年である。音楽好きでギターが弾ける。BGMをやりたいと言う。夫婦関係に緊張がある。父親も大柄な人で、スマートな中年紳士。セールスマンと聞いていたが、芸能人のような感じの人。クライアントは髪もきれいに刈り込んでいて、まじめな高校生という感じである。開口一番、父親が発言し、「自分はK市に住んでいる」と言う。家族はしっかりと仕切っていると発言する。この子どもは良い子だと思い込んでいた。信じていたが、クライアントは音楽をやりたいと言い出したので、困っていると言う。これからはしっかりと子どもを指導すると言う。学校側がカウンセラーの元に行くように言うから仕方なしに来談したと言う感じがする。

面接理解：高校長からの要請で、カウンセラーの元に来談した。保護者は来談そのものが、否定的であり、援助を求めてと言うものではなかった。

家族全員が表面を繕う傾向が強く、内面は表現されないままで、しばらく面接が続けられたが、クライアント自身が、学校を欠席しなくなったこともあって、今後、相談があれば、どうぞと言うことで、面接は終了した。

事例15：中年女性の来談

#1：学校教育における教諭のあり方について話し合う。特に問題ある子どもへの対応方法について事例的に相談する。

#2：指導中の子どもの事例を持参する。ケースを中心に検討する。教室に入らない。家族は祖父母と両親に姉妹3人の内の第一子、長女とのこと。

#3：自分の担当する事例を持参。クライアントは両親に祖父母と2人姉妹の姉。両親は共に働いている。クライアントは1年生、妹は幼稚園児とのこと。保健室登校が続いている。甘え、わがママがある。保健室で、生活（学習）する。保健室でのやりとりを記録されている。それを一つ一つ検討する。

#4：専門書について相談する。

#5：事例について相談する。クライアントが体の中に「虫がいる、虫が指示する」という話をしたとのこと。自我のはじまりではなかろうかと言う話をする。この後、橋の話をする。これは他者との関連性が推察できるのではないかと仮定する。

面接理解：学校に在職する教師が、自分の担当する生徒の具体的指導について相談する。ひとり一人の子どもについて、丁寧な指導を心がける教師の指導観について検討する。

事例16：女子青年の来談

クライアントはバス通学。朝に起きて、数キロの道を父の車でバス停留所まで送って貰って通学。最近、学校に行かなくなった。両親の協力を求めて連絡するが、協力的でない。勉強は良くできていた。「息切れ状態(?)」かもしれないと言う。担任教師が相談に来たが、結局、クライアントは来談しなかった。

事例17：女子青年の来談

大学卒業後、A市の会社に勤務するも、混乱して仕事にならず退職する。A市の雰囲気は自分に合わなくて、身体反応(心身症)がでる。不安、無気力、心配、虚脱感、けだるさなど。両親はU市に住み、健在である。

自殺企図。車酔いの薬を60錠も飲んだが死ねなかった。体温が下がって冷たくなっていたクライアントを、母親が介護して、どうにか助けてくれたとのこと。臨死体験をしている。

面接理解：クライアントは学生時代からカウンセリングを受けてきた。卒業後、指導教官の援助で、就職したが、就職先の雰囲気になじまず、多量の薬を飲んだりしたが、母親の援助で、命を取り留めたと言う。臨死体験をしたとのことだが、はっきりとは意識化できないとのこと。医師の援助などもあって、健康を回復した。本事例はカウンセラーが以前に継続的面接を実施し、症状も軽快し、就職後の報告である。

事例対応のための留意点：ここに掲げた17事例は特別に選択されたものではない。受付順に検討できそうな事例を列記し、分析・検討した。

事例1は、医師から自閉症傾向と言われたとのこと。診断名はともかく、ここでのクライアントの悩みは対人関係上の不調であった。クライアントは積極的にクラブ活動にも参加するが、人間関係に悩み続けた。クライアントの訴えは被害者的な立場での訴えであったが、よく聞いていると、その訴えの中には多分に関係念慮を匂わせるものがあった。涙ぐみ、時には声を出して泣き出す時もあったが、とにもかくにも1年間、単位も順調に取得し、無事卒業し、郷里に帰って就職した。

クライアントは性格的に特異性があり、かたくなで、一途で、他者との共感性に乏しく、対人関係が緊張する。特に他者に対しては常に攻撃的・被害的であり、緊張関係を生みやすい傾向にある。このようなクライアントに対してカウンセラーはクライアントの主張を傾聴し、共感するようにすると、クライアントはカウンセラーとの関係の中に自身の安定感を見いだして安定した。カウンセラーとクライアントとの関係がクライアントにとっての精神的母港機能を果たした。

事例2は保護者が子どもの行動についての解決をもとめて来談した。クライアントが保護者の価値観では受け入れられないような行動をしている。何とかならないかと言う相談である。教育相談活動ではよく経験する相談である。保護者側の価値体系はそのままにして置いて、逸脱した子どもを親側に再度引き込もうとする相談である。保護者は共に高学歴であり、クライアント以外の子どもはすべて親の価値観に添った生活をするに対してクライアントだけは、保護者からは予想も出来ないような行動を取る。クライアントのこのような行動は、家族内力動のあり方の問題を再検討する必要があることを暗示しているが、これに手を付けようとはしない。中断する場合が多い。

事例4のクライアントは、「抑うつ傾向が強い」との訴えから、相談がはじまった。始めは順調にカウンセリング関係が形成されたが、状況は好転しない。悪くなるばかりである。精神

相談事例における教育相談活動のあり方についての検討 (1)

科医師に相談して、薬物の援助を受ける。医師とカウンセラーの両方治療が形成される。これは相当の注意が必要で、主治医と連絡をとりながら、面談を組み立てる。

クライアントは自傷傾向が強くなり、入院治療が必要となり、医師による治療が続けられる。カウンセリング関係は中断するが、クライアントの状況が好転した段階で、再度カウンセリング関係が復活する。この時には医師からは薬をカウンセラーはカウンセリング的援助をと言う機能的協力関係が形成される。

事例5は事態に大きな変化はないが、問題が発生した当初よりは、緊張感が逡減して、慣れてきたと言う感じである。

教育相談活動では事態に対して関係者が慣れてくると言うことで問題化が逡減し、何となく落ち着いてくると言う方向で、解決に向かうことがある。

事例6は、他者の問題を話題して相談と言う方法で、相談が進められる事例である。クライアントが潜在的に求める相談(問題)が他者の問題についての相談で、解決を図ろうとする方法である。この様な類の相談は以外に多い。自己防衛の強く機能する問題を対象とする相談活動ではよく見られる接近法である。

事例7は学生相談活動でよく見られる相談で、自分の問題を対象化して、学問的に検討し、検討結果を確かめに来談すると言う相談活動である。知的に解決を図ろうとする傾向が強いので、解決法は操作的であり、理念的である。

事例8は遠距離からの来談者であったが、面談内容は職場における対人関係上の悩みであり、クライアントが被害者であるように感じられるが、本当に被害者なのか、それともクライアントの被害念慮なのかを嗅ぎ分けることは大切なカウンセラーの能力である。本事例は、深い病理を匂わず面談であったが、継続面接は無理と言う条件で来談したし、クライアントは自己の問題を確認するために来談したのと考えられる。

事例10は大学に入学はしたものの、不本意入学である。クライアントは姉を理想として努力してきたが、結果として姉のように行かず、不本意な入学となる。入学後、抑うつ傾向が強くなる。精神科医師にかかり、与薬され、薬物療法中心で、指導が行われた。学内の相談機関の活用には不信感があったか、それとも学内で相談機関を活用することで評価されるのではないかと感じていたのか、クライアントは学内の相談機関・機能を利用しなかった。クライアント以外の家族全員が有名大学出身者であり、クライアント自身にも上昇志向の強い性格傾向が示されていた。学習に、部活動に全力投球し、激しい焦燥感を示していた。権威ある医師にかかることで心の安定を図ろうとした。右余屈折を経て、卒業した。

事例11・12は共にかけ込み相談であった。事例11は、電話で相談を申し込んで、1時間後に来談され、セックスについて語り、自分の言いたいことを言ったら、落ち着いてきた。既に医師にかかっている、与薬されていた。70才の母親と、クライアントとの二人暮らし、兄弟もいるが、寄りつかないと言う。何か家庭内力動に歪があることが予想できた。

事例12も父親とクライアントとの関係に複合心理があり、特に父親の経営していた会社が倒産した時に父親と共に自動車で、当てもなくドライブした時には、父と共に事故死するのではないかと恐怖心を感じたと発言し、現在も独身で、両親と共に生活している。父親に対する複合心理は一回だけの面談で氷解できるようなものではない。クライアントは今後も複合心理を背負ったままで生活をするであろう。

事例13はクライアントは強迫神経症と医師から言われて、治療中であった。クライアントの心的背景には激しい母子分離の問題が潜在化していた。母親の掌中にある20才後半の青年であった。

事例14は相談を受けることに拒否的であった。ここで示された相談拒否は、クライアントとその保護者の精一杯の自己防衛の現れとみた。

事例15は子どもの指導について、担任教師からの相談である。しかしこの相談には複線があり、子どもの指導が上手く行かないことに悩む中年教師の相談であることに注目したい。最近この類の相談が多く、学校現場が緊張感のある職場として、事例を通して浮き彫りになっている。

事例16は担任教師からの相談で、保護者からの相談を要請し、保護者とクライアント自身が来談されるように要請したが、無反応のままであった。

事例17は長期間の計画的面接を実施してきた事例である。始めは拒食が激しく、医師の指導で、家族療法を受けたが、かんばしくなかった。退院後は、医師からの投薬を受けながら、平行的に面接を開始した。面接中に大学を卒業し、指導教官の援助で、専門を生かせる企業に就職したが、職場での対人関係が上手く行かず、パニックを起こし、多量の薬を一気に飲み、自殺(?)を凶った。退職して郷里に帰り、再び心理面接を受けるようになり、現在は安定しているが、就職するには不安がある。

以上の17事例について分析・検討してきたが、事例は一つ一つが多彩であり、多様である。どれ一つとっても同一事例と言えそうなものはない。これが人の生様だと言っても過言でない。

参 考 文 献

- 浅海敬子 1990 臨床心理学における事例研究法を考える (1) 年報 心理臨床 山王教育研究所年報
NO.1 P.75-91
- 芋阪良二他 1976 事例研究の意義と問題点 臨床心理学事例研究 京都大学教育学部心理学教育相談室
紀要 3 P.1-12
- 鐘幹八郎他 1992 ケースカンファレンス 臨床心理事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要
19 P.2-36

—平成8年9月30日 受理—